秋風詩文集

坤

楓風莽文集巻之下

秋風庵月化著

芭蕉翁像畫賞

文八代の衰を挽し一道天下乃溺を救ふに韓退之乃如小蘇文忠書ゆとなむ西行と申ひし是其實を存せるう布風雅をふまをとしうめ宗祇歌大槩の説なりり檀林の斧を入て西風の一路を伐平きしい此翁なるう歟此翁なる哉

上田三段

物くさく友とちかけて此庵の白花の料ふいくさ乃田をとらせよしと汝法し給ふこさんはらりをうこうゆき朱帯して腰をれるもむつらしけりなく て月毎ふ五斗米のあるをたのみかさ淵明の秋を待しふ岩ふ醉んうめくや

手うゆをハ成ふ所をれるとやふほくきに耕粒の時をとくせる必す生ふよ

ちち母乃うう聖つくむ窃田ふて

筑紫題林集序

大伴の つ乃長ふふたくし此国ハ仇ようる もくくの城うとまきくめくうえうりして南氏此業のなうの国ふ宝の吉ふ行ふんとき者 ふくしそれのくうハ或ふ開屋をとうまして往ふ

人ゝ名ゞ[illegible]め戎ハ城を築ゝてゝみゝよの
水城なゝ申なる皆賊を防人の備ゝ[illegible]く
らゝはゝき世のゝ[illegible]ゝにたゝむ今やゝ跡
ゝゝも尋の住みゝて斯も昇平の化乃及る
を仰きゝも拜あゝゝゝれさてゝゝ文雅
乃徒芽も千里ゝ糧をつゝまゝ西の海路乃
歌枕凡ゝ書とゝきなゝる浦浪もゝ[illegible]た
陸ゝ行あなゝゝしゝも海を渡れる風流
ゝゝゝむハ文明ゝ宗祇ゝゝゝ遊法公ハ
天ゝゝ来ゝ世ゝ此外ゝもあゝれゝ此ふゝ

ゝゝをたゝゝ紀行ゝ世の人ゝ口すゝめゝ[illegible]ハ
あゝゝゝゝゝ俳歌のゝゝゝなゝゝゝむゝゝゝゝ
ゝ書文化のゝゝゝ春坡ゝゝるすゝゝの九つ
乃國人ゝゝゝゝる四季ゝわゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
なゝゝゝゝ乃歌ゝゝゝを拾ゝて一冊ゝ家ゝゝ
國人是ゝ五ゝせの芳をゝのゝれゝ又ゝゝゝ乃
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

夷相辞

仲庵の発れ方に一井あり其傍に一本の
乃桐の木ありて直幹亭々と数十尺園に
こ二十すぢも繁茂せるなり久しく植ゑん時を考ふ
るに八せ年を経てはじめて其葉しげ
げ枝やゝ大なるも削られ変じて枯て惜
せすれども吳人のごとく焼せず焦尾の名をも
求めずまして大和琴作るべきの夢を来らん
姫ぶも待さしてはこれ八只鶏啼かざる塀の内と
なりて古翁の化を変ずるのみ

まゝなるかしを或日人来りてこれを伐れ
販さんとすれども得ずとなげかなりてこれを
事乃あるべきよを後にしてかゝしき名き
ゝるこゝろすれども花咲てあるく清明の日を
告一葉ふるくして天下の秋うとたゝかるを
いかゝひんなるべし絶さめやと思ひあるもいらん
つるふさゝくい蕃まれ法木の性なりとゝく
知るすべ杉の数ひこそ根ぶり伐て八年へ
生へねこそうきまれすしてまるやいな蘖
すべと伸出て後を親木なるも勝れるあを

其生ぜんまでと楽しむすやたてせちを設て
二升米をも代るそのの料をさし置く頃て
てくと言さすまうおきもるぬし其本しく
文机の具作るや又火桶のこしひるやもしハ
まくたるこれ山つきむすめ嫁うとくく乃
調度めくまの造らんの料うやと国へそ答を
撓くくくく笑みつなのをハ殿を撓く城
業くす桐の案弱なるちくくも入きすして
こくらの度を撓く妻るれにを糊するの外
むつくけれるこくの事ハ国こうを別やまを

といひ土除うち放しとふさたく柿の油打
挿ふくいぬ嘆呼非情の物なれをいくとし
ひさくに見馴さりるむものをせめくことき器
まくもるさて終まハ泥土よ身を果さすま
めくうをと祭うと祭うをせつるを悔さつり
しまの風友の居りたるくくらく殿とて安下
まいやくとのくこのなるちうるの法うの物くれて
支那よくても安石唐楽をそしめ国人ま
困めくまの事多くうハ其人くの傳まくしるせり
さくくも女のそけるとく作をる笛まハ秋の

鹿もうめ来るとかの罪深さやうなめさぞ
役のふ角や教待法師なるべ行歩を投げ
よいつゝせしと閉げて其縁を引きても悉皆
成佛乃拾ひの八洲るまゝなと海めるる
庭ゝくゝ日も早暮く東山のいつれる月の
いつゝよりて物たさいすゝちはしめ乃
猿を照さをうちあまてかゝろいひいれ
ふゝ素れたゝとおほさむ秋の月

伊豫日記序

日記といふの書坡もろゝろみんとするまに
行ゝさあをとやとゝゆうちゆるてい者に
つけ雨ふはけ旅宿の秋乃ねゝさ見るも
ゆも感あれそ日ゝ雲ゝゝいとるゝ且ゝくま
述ゝかゝさのたゝゝせに関ゝる人毎ゝ
いゝ日記ゝゝ奥しあるをめゝも耳馴く
すゝろ題せるとゝきゝを御書所乃士佐
ゝふあゝゝんゝ對ゝく歸けるやとおし
ゝゝひゝ思ん人もあゝをかゝけゝいゝく顔

に任すまゝにあんなる小紀氏のかい路へる
中にハ海賊の事あまた所にありし路ふを
みなせのほとりみえす膳つまき心もとなき
せらるゝにこゝの船路にてさるおそろしきに
憂ひも聞へしたのしききさるにも浪風やすらか
なるくらしなるこそありけむなん此一事のみ
まさにありといひてもまことに太平乃世の民に
うまれあへるをなりけるにて八百日ゆく濱
つたひにもとも人ハ道を讓りける里の山を様なん
にも枕をたかふして臥へく笠一蓋杖一本に

ふみわたりて四海皆ゝ家ゝにくらし起歴せハ此
時にむかへるこそげにめでたき君か代なりけれ

限筆の事思ひしなき消息

古へひ賜りし御書中にハ此之候ハ當時西の
國ゝ乃微ゝ伊豫の様と我ゝなりと
先以御きこへ頼り候ひてめてたくの事とや
謝候得共過當の附會に恥入候てなよしなり

そゝぐ流者ゝ候に素ゆゑの法ある人のもと
よりそをさひよ五元集を見しゝゆゑしき
事ひとすと思ひ作り侍るに入るの栞をて
この流を指さしゝゝ其時乃呼家を試侍は
清ゝ其骨氣老成貴ふに彷彿ゝわと世た
ゆゆ作ひしゝ程なく物故と聞候ゆへうの
高章法の以年秋を因ゝたるもの者猶
尾を敷き作ゝゆゑ来りしてもさしのてゝ
ゆゝゆゑ判をゝひ新波は乃人ゝを句ゝのは
あゝと詩ゝ合ひ候三十年の俳業八言田

ある門生のゆゑく梓に鏤め候是知命迄
の作ゝていまゝ古撰の潤ゆゆぬをす作ゝを
同流乃清等ハゝられゝゆゆてゝゆそゆ候き
そゝハ一株のそせを茶ふ陰を仰よて学のひ
作もはゝゆゆく何流角流ゝいひなゝそせ
しゝゆゆおのつゝく水波の清あゆく交ゆ深く
杉稲星候ゝて其のゝ蕉門ゝ唱へ俳人ゝ
ゆも訪を作ゝられゝゆゝそつゝはゝゆゆ名をゝ
られ作ハ此十年作ゆゆなるへく作ゝるに
梓戈ハ素ゝゆ紙一乃蕉つ名望の人ゝ承作

たゞもとく家事を顧みゝ浮世よ
り月雪の外事なきまゝ閑居あら
ハ老てまゝ家を捨て精しきに
貧しく作我等も退隠のそしめハ
しさ素意よりく作ひしるかゝ孫ハ
ゆゝ身のとを身をおゝる事いてきぬ
たゝいま年娘を悼める中を中述作
いそすかるうれゝまゝ作ゝ
岐の出来ゆく朝よ米銭の活計を苦む
夕よゝ花鳥の雅事を楽ゝ作いんとすれ

又打ゝふきゝる方疾を風ハも妨られ作
奥に又宴測のゝ小茶ゝ自恣世ゝ調よ
物ゝす一杯をゝてとゝ知せゝ
法せゝれ作此人歌逸凡ゝす高壽を保
ちく閑の楽を佳聲を残ゝれ帳是も及ハ
さゝれ幸ふ幸を雖せそ知自やゝ方を述
ゝゝふ等しく作いゝゝ二受の徳を陰ゝ
ようさんや昔歌人の中に隆信朝臣宗教臣
つゝひの梅あゝしもひゝゝハ世よかゝらひく
公務行ゝ知ゝまゝてすけて寂蓮法師の名

あるものなるべし左なくいつまでもかく
淫酒耽色やめて道の恥をのがれす
とのゝ歎賞しとゝ侍りしかはなるも
此人の述懐更に人乃こゝろもなほえすに侍案
こゝ〳〵六十二翁こゝて且老さゆ日暮途遠し
以来の語言も日〻毎に衰へ行くこゝろ悲しく侍
白菅の長き根なりこれ抽きも貴賤常
信せる実情なるこゝろ〳〵なるこゝろ
帰るべくこゝなるこゝろ移り入侍穴賢
文化巳巳年

木綿山つゝ

遊ゝ國乃由布山雲のこゝろあり〳〵山の裾野に
なるこゝろひんゝ此方〳〵極く佳人乃面ひ彩あり
其左右すゝ〳〵芝生にてこゝろ弁ゝ岩の如
ひのもゝ〳〵けり一寸餘まこゝ二寸あるこゝろ此其葉
其花形その色濃きあり薄ゝ白の似ゝ
やゝ〳〵こゝろ〳〵ゝ〳〵ものをいへりこゝろまこゝ
はかまこゝろなるゝ一むらゝ走をなして目も

あやまりもとこゝにて見るの法こゝの山をと
らきるまゝにくゝ
面りてゆゝ人もをもとも杜あ
といひたせゝを豊臣紀乃海ゆゝ中ゆゝ加へし
二十位ものむらしるゆゝるまゝ母上ゆゝ草は
筆を好ゝまゝひゝら頻ゆゝ此ものゝあゝ結ひ
て彼あゝ里行ゆゝ人ゆゝ頼ゝゝ一を拾乃際を
ゆゝ宮ち其拾ゝ土をくつけゝゝもてこゝを
根こゝの事ねんゝゝゝひあつゝくゝゝし
植たゝひてゝゝゝ愛せられ後

ゆゝ鈴出ゝれゝゝも辛ゝゝゝたゝ葉をゝゝゝ
蕃りぬゝれゝ所異なゝをゝ風出ゆゝあをゝゝ
いゝゝゝむの頃へまゝゝゝなゝをゝゝけゝゝ
ゝゝ事ゝ輪ゝゝゝ吹出ゝるゝ居なゝゝゝて
興ゝぬ

ちひゝゝに咲ゝるあやめゝゝゝゝ

筑紫琴ゝ後集跋

八朔坊ゝつゝゝ琴のゝゝゝゝゝゝゝ

ちくせの人々の集て其音をもきゝなれるなるべし
やゝ爪休ませくゝ又は叩を戒るに接の浦四て
いつもさゝあり筆人乃國まゝてはゝゝす 頌
わるる字器百乃為人まゝてゝゝゝ道のゝゝ葉を
述させかゝてうち過る鼓ゝ瀧はゝゝ山川の鳴る
よゝゝたゝゝゝ示國出〳〵豊國なるゆゝ此賞
ちゝくもりんゆるゝゝゝゝんを坊もまゝ位と見
てゝゝゝゝ此續きれゝ巻はつゝゆゝゝゝゝゝ
きゝゝゝゝゝゝ此坊のまゝ脱ゝ身の学未ゝ
ゝゝはいつゝゝるゝゝゝゝゝゝ人のゝいゝを

なゝゝゝゝゝゝ心を浮るゝゝゝゝ秋風庵ゝ跋ゝす
八朔坊稱夷柏阿波人其人目眇且聾故戯及此

梅翁乃本像を法一軒ゝ送ゝ寄
京因ゝ翁の門者なる西國ト函ゝ彌せゝゝ家
伝ある日田の宿ゝゝ風胃等ゝる師ゝ皆ゝ都
笑ゝゝゝゝの法集ゝ送ゝゝゝゝ又別ゝ技藝の妙
ゝゝゝゝ東都ゝの都ゝる此日ゝ厚くゝ侯の頑眄
を忘ゝゝゝゝゝゝ摩ゝゝゝゝゝゝ述すゝゝゝ

刀法をもつて師乃恵を追慕して
彫刻せる翁の肖像の面影をうつし
ゆくまなこも我庵中に迎へ置きつつれと年毎
乃文月をもたて仏や家の食のそなへしに
あさみ五彩堂のあるじ此像ほのかなりさあ
らそつ字の堂にいるこ安んじ置きつつせむ
とそいるとこそ此像の伝燈を挑げ来つるに
祠宗をもめきそたとたそふつへく如去の
敬をも盡さそうの思念なつまとしそる
まくも花庵こ十餘年乃名残を惜み侍

きそこもまく此なきそれの古々経波はなりれそ
蕭の一在れ夢の中生きそそれこ此寄
にのりそんもそこすいるこそらあこそ乃霊
魂そこ幽老のこそろそせるもかるなきまと
なこりまいこするこはなりぬこらんのち
まのにこりなそしそ七世に孫う仏風をも
みこりなそこいこ其業のこそりなりん
と遂こせ給ひしと拝しこ庵外數
百歩より見送りを恭らす

花乃山踏

此花江南所無也於一枝折盗之葉者
得天永紅葉例伐一枝者可罰一指

壽永三年

とあり〻ハ我れの文ハ和歌の筆とて須磨
に什物とハ世人皆知ること是をもて石刻
せる扇の半面に書る詞
文化年中ある書乃ひみとり所ゆ出ふ世る

人の中にひとりハ法沛をもてるゆ乃櫻
手折るゝ〻つゝるゝ〻ゆゝ乃
者人見ゆゝ〻ゆゝ〻ゆゝ乃
の院連行ゝ所の作法のりひてんとす時ゆ
此俗ふゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
御ゝゝふすゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

梅ゆ折さゝらゆ捨る命ゝれ

とあるに接せるゝ人ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
歌ゆ折ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
さゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

即ぬのそてに風流の拾うをかるむしめき
く物語のやうなるみやひとを今の世よりも蘭
つるをもて知とも出つる一世代中より或人すこ
出つる腰なるあかまつをひきさくしたまへ
うく其句の故なるよりれる扇面の石板を
是なるものをもあかく持合せをうをうをき
此をうに代方り件の詞をよしく探りをうをる
あかるる変を首の俤を思ひ出し筆の手ふ
すつるをうに詞のうに筆乃をうをる
拾をるに剃れる書しハ櫻の事をしして

梅をうあるをす既をに江戸の浦十番をもの木
の梅を出をうをを行のをうれをも世人
拾をのをんにうをれほをうに此邊江南をと
いをるをうをを中をこの僧もおれしをん得し
をうをの作をうをを江戸を好をに
たをして益をう唯世俗のをうををしる僧を
志波の浦乃ををうを漸西乃拾の乙姫大江
山の鬼茅八皆我堂のをうを得をに故をるをも

隈川年魚諱

豊國のみちのくちかなる日田の縣より隈川と唱る
ところにて此ほとりの隈日のくま星の
ほとりに歸けるこゝにえ乃もとなる日田山乃
此川中にてれそこにつゝまやあるむ且
流きよりの隈町の人家より隈町の名も
あれいらるゝそのゆゑとなるんうし
源南の方ハ肥のくにちかなる國とひんしハ
玖珠の郡とのこ川なる今ハ一ちにたれて
爰にて則底なるこゝにるそゆれを見り

住るいろくこゝらに見る中にも鮎をもて食品
の美味と稱す理ゆゑ書歸り毛蔭こゝゆ
嘉時孔雀するこゝにるまくもて海士人の
ゑもくゝ獲こる魚ハ殊よくこゝ有るゆ
十三里海をこれるゆゑなりてゑも失ハ得る
こゝ有こ海なこねそうなこゝるみの猪き
も知こゝるこ鵜川のかゝを夫奴婆爰麻乃闇
う濃こゝ其外谷まこゝゆ河こゝゆ
ゑこゆるするゑるこゝ見ホ乃葉を月ゆ根法
もゆゑこゝゆを日こゝ肆る魚を絶さす夏昔

乃管膳此其なるべんはあるべきよ新く嵐の
はしめく身を入る比ゆりの上下五三里位の
間の淵ものあるを数ヶ所河水を汐業を
催せそ必流をの順ふなる魚乃心を計れる
成〳〵猟の誘ふ水あるべき行事あるハ河べけ
なるよ西に降るべしる後の翌日のみ面り
ものあるを出てるころほひ淵えとてやうるる
るめきよりまハ此時なりけり只本日に出るよ
数千喉の魚簗る満ぬ其形ちかしらちさく
ろいろ肉高くありて太く逞き年世るの

溪鯉よ数ひせす敗くなのこ〻杜梓てるつよ
一尾の重さ八十目ゆ百目そゆるを普通
乃物とそろれ三四十目を加るを家
ふそすべきそこ人ゆくさになのきむし
一行なるものを見ゆしゆ今ハなしとやき是
更ようきそるまも聞えすそれ通あ
んよ塩らのいをなりゆとてるひ高貴のなほん
許よ捧んようさひそ又作ことにあるよりえ
いるみせむふ宮の出るしてハ烏賊のるさな
ものそひめているそす其隠せる物をそしく

殿さまとの方さまを有るハ滅多一笑すべし柿鮎
よりなるべき國元十あまり都のあるハ
歌人乃景物なるべし今世つれ浦川ハ氣長き姫
乃尊の釣られたまへし故事を傳へし
生澤川を風ひ物語り作りて題目又の如なる
を沈里其餘の國々ハ或ハ白砂千子鯉や
或ハ肉醬うるなどに製して名物の數多
等しなるべしとなるハあれど皆魚の大なる沙汰
なるべしひとり岐阜の長をこそいとれなる
思ひなきとそれぞ長濃地とそ入しく控し

とまへし諸方のなをせしら家此和鮒魚
なハ沈すなるべしなるべしすなるべしと作ら
きまきまあるべしなるハ隅川の鰉をこそ銀口魚
中の主と稱すべきなるべし此魚を
たべみるべしなるべし所のもてなしなるべし
とて肉味淡くして旨うして上腹なハいとこ
ろ交をるるなるべし易牙舟朗ら古も持こす
くこそすあるべしを宮めんハ長源のなるべ
味も又殊きこなるべしなるべしゆるハこそなるべしそのあゆ
なるべしなるべしなるべしなるハあるべきあるべし日田

よしなきものあれと世をそしれさる
うかいなくもなほそらるされはさつ國人を
對せん語の柄をもとめ侘しく事のすさを
よしなく記しそくことそうなむ

休俳帖

いはの間をもとめ庵名樹をつくりて外閑の
こころをして行いを俳を事に又遠く東北

の方をよりて文通あり去年よりそこ又ことと
因を求め来俳人の新さり頭俳に道乃
業をとゆくはめいとく喜ひ可申ようて候
たるる馬齢つるつるる木春に古来稀也を
いつる年を減候り身を宿疾あり殊を業の
ふ自をもく佛法の報をの會釋を堪
うくく俳句を以来俳の事に時節の感悦り
催されて候てふく乃動き俳々一句も可
中年に格別に心ひく初めて生せる苦心に彩
めす品雅年を氣随をすくく賤意を

寒ひ侍らゆる侍得て言ふ侍はゝと承
侍るも其時こゝ應ふ侍るはゝ侍むらいの
殷いかんゆるし下さるゝとてこゝとゝ又実力
を得惟時も御坐侍らゝ志無ゝらゝ企て
世動静を伺ひ候事有へく候是世代の
申ひらんを不ゝ乃又もに返しるゝとゝく
徳侍ゝ侍る或人の居候ゝ事のふるゝを
笑侍ゝとゝ敬す狂句

是程ふ思せひゝ筆乃寒さ哉

とゝゝれゝるゝも年ふ悲しゝものゝ侍

斯ゝゝ廣人ゝ寄しき身ゆへ向未徐意の
子細を申断侍ゝゝ不ゝゝゝゝ迷雅情
ゝゝ古元捨ゝふ孤ゝの風流ふ打ゝ古品
乃ゝれ侍へゝし老屋の樹を伸ゝゝ事
ゝゝゝゝ候頓首

文化十二年十一月　六十九歳

いさ那乃肉を謝て
みゝ月中鯛ふあゝゝ塩鮭と芭蕉の公羽

乃すせうれし同じ比なるの唐津なる五雲
の君らの其皮肉をめくみ給ひ羽ふた
鯛あり〻くうて賞翫のことしよいく此地
ち櫻の名ゆ思つるまてたりの花ちりしのち
其鯛さへも来らぬものとやかて淵しく
さうへ伝るとり音迅よ頃くものるくい風味
ひるへうもなしねまひよや海上寒風の中まて
の獲物を今此炎熱の山家まて喫せんとハ
理とも梅雨羅漏うの此賜なれるものうめ
霜の日もとへハ源しと宜くも

明府君よりの御賜まて賀筵を設く
席上乃言葉

いつくまるとハるせまし世の中にて大やてるも
ひとまき齢ひ幸ねつくるまハ獨こち打住居
さわしも時なる就愛し嘗へる実まし
酒しく拘まつてそてたまひて甘旨の
その等まとまるか於あるやたれしうむ
こゝろみうれなるもとの里うめ

いま[illegible]方より得させ給へる星の井
て[illegible]三度酒を肴添させ給はれのもしるやや
孫[illegible]宮つとひて出うへ[illegible]物くはへ[illegible]の後を受
へ[illegible]との知らせ[illegible]ことかしこまりて今日は天晴
乃まらうと[illegible]たなりまき脱まろれのやう
まくわ掛るれ[illegible]も使たしこまるとく
備邦の侯家[illegible]めるさせたるつるて物菓
兩品を花[illegible]を[illegible]差別しての御賜[illegible]るいやう
うへなる有様を袖[illegible]も分も給[illegible]かて
宴席の躰[illegible]く風流の情極[illegible]れ[illegible]侯言

如の嘆[illegible]梁乃塵[illegible]ハ[illegible]て廚の方
[illegible]ハ器皿の数ひとり掛[illegible]膳[illegible]寄[illegible]
[illegible]仲人の[illegible]給仕の役[illegible]見
孫寄[illegible]ひ[illegible]畳[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
其中にあるをひんくハ多[illegible]髪[illegible]皺も
伸[illegible]ま忘せ[illegible]て猶いつまくもなる[illegible]
[illegible]花[illegible]ハ[illegible]歌ハ

まことに心乃ひろみにやとおのつく笑壺の会をと
催すも皆おほんいつくしみの深く厚きによれるか
とおもふ事をおそれみかしこみて拜謝
し奉るものなり
あさん霞の外にも天のこんつくれ
文政戊寅八月廿五日　七十二歳

諸集に著せる予か句に誤りあるを写す說
朝顔乃さかりは日比常に吟は山椒哉

釣狐の狂言に
そればこそ世尊寺へお出やれ何の馳走ハなけれ
とも日比常に山椒らい茶をやゝうそうかへる
伯蔵主かいほりれきまに垣根藁なと這せ
てんとの見こみにて飯菓の時なとをかけ
なせける物ゝり古言もよく趣向に作ま
えてきれにて其語のまゝ用ゆへし一字も
かへるくハ一句此俗なり
涅槃会や細ゝ（ほそぼそ）鳴きし鳥そ
山家のほろゝと布申寄りけハ又うとそう

如来は母うとて思つとある人行基僧正の歌
をもつて聖者一切の衆生は皆我父母なり
と梵網経乃ち文をもつてとき給ひしとき
又古今の高野山をく父母のとまりをも
忘れ難きと雑下と聞えしも是を思ひ出せる
他なりとある拾遺の中なる風生せる
をもつて文の辞を調へしなり
わが一句の言葉を読くを読れく雑なる
し然るを細に眞名字を書るその意
いかに解すまや ふ知恵理を解すとも

味ひなるべし
仰向ひくりかへるこゝろ雁はなれ
こゝにあるあハエケセテチヘメレの五音を、
力れなるかをもくを弱来乃ち示す義
なりとハ切なるをんはしるなるを
いとあさまし
垣根なる鶴雛 二月の朝なれ
東風の凍解うしたるに雛の離をも引連て
塩花の土をまく投して捨てしたるなと餐
こゝむこゝろきこゝろとはのさしいでる

素の景氣をよび述てるなりさるとを弱と
ゆゑてこそ墻根乃翁何事とや壽老人
林和靖を問て此句を解するに
是もまことんむらし奇こせの米あゆる時
雲花らくれを龍すむつもと葉公ら故の
とゆくらめるを西翁ハ澤まころすめと
雖しまひこそ基後朝臣の失たるこ
女文を書こんまハ清濁のこちめいころ
つこゆしなるくしまこそ鶏と鶴とをこを
を國字をも書違ふへまこそ

ふつこと恐し霜花れ鶴鳴三羽
是ハ又翁なるを雁と誤れり雁をしてハ
其情薄し夜の霧乃ふを思ふこころ
いつまかこそ花の字の淡もあるめ
苔の五章子ら句ふるを難波ふこゆ代人の
因ふを任せく集ふこ川又ふゆものてか
ふの仁樣行こく世乃ふ流布せこを損
斯乃如く句言を害せるを人人子ら未熟
の程を評せむこおを人を歌を評をこなり
ふゆとく移情もくをせるこころをせをハ

恨ることさらなれば又えもいはれぬあさ
らめしいろ百里の外遠く風を放ちて吹きう
ちいでたるとうかとして常よりもくち
惜しう成り書一巻ともさしてとてみまき
くりかへしくりかへしつゝ中に
浦なるみちをたどりつゝ
きのうちにはをさかりぬる
此ようかりくいと一首のうちめあし
くて感慨すくなし
夕されはさゝのうへに此川風よ

霧

友まちかねつゝ
川ゝ郭はいとふかくなりゆ
うかゆくる人をとゝ流の山あるしよ
さけしられいのうあやものを
山ほとゝぎすとゝ押字此蕎麦
色の人ゝ浦なみはるゝ柳　新
とゝとゝとゝとゝとゝとゝ
はちまつあかくとゝとゝる人ゝれ
さつのかゝるとゝに誤りかくの通りなり
陸ハ松しとゝるゝ人ゝれも男女あう手習と

導くとあるとてる人一首三十六歌仙なと
取あつめたる杜撰せるに見ゆるハ多く書肆の
手より出されハ責るにたらねともあやまる
ふらしれを頼しさる輩ハ猶る物の中にも右
の類少からす殊に是等ハ平生に口すさひて
諳記憶せる歌とものなれハ写本にて不圖誤も
ありきと印板せるハあやまらしめ千里をくるへ
校合の没著つよに徒然ハさそりかなし古人
物ちることあるも泉下に眉をひそめらるへし
和歌の上へにしもかかる疵ありまいてこと

俳におひてをやいつしておもひ移んすへきるに
しもあらすしとかねての向へからす晴く
夢の覚たることし是に陪ても自後たへ
ふ乃そくのまなるす人乃今へハ思ひて咎めハ
只一己の業に過失すくれつるむ事とも悟る
して老年を楽む外ハ工夫ハなかりけよ

七つ目宗の賛

俗間より十二支の中我甲乙より七つめなり
崇れるものを崇ぶ事ハ
支那より来れる道家なるに似たる事あり
其遺風なるべし森乃楚濤牛を画せて
黄を求む此言甲の七数を挙くいひ送り
こと歟

うつしけるも　大内の御車牽るゆゑ
緣授乃資けなるべき此年の功労あげて
計ふ事なす
宗廟を祭るなれハ只ぬさ捧ぐ外なし

なれ共預ることなるも神社の祈り
す釋教なる親しう
隠君子ハ変じて水上乃水を飲ひ角を
拭きくうるもの喘ぐを中ゝて寄るも
皆賢去ゆゑなり
ゆゑハ人なる戯を則て和順なるも人主ゝて軍
陣を用ゆるゝハ猛き中前なり
笑む中に毒あれハ輝て含ます思を使ま
左し右し進むも止るも皆人法を解してそれか
不知の間ハ識のゆゑといふ

庭訓往来にも牛を記せり但てるよりの人
情の事にて甚國ゝより四方へ販きて高貴
乃屋を潤すなり彼金牛罡の名而已傳れる
ゝを勝らん

桃林の野に放てき太平代を化しるあるや
風流乃徒にも頒きて黒牡丹の號を付柏
老人宗祇ゝにも因めりて蘭けて甚生質
無雜にもあらしと思ふる

そ後の七月七日乃牛
此物乃七事を稱すに假名の韵たるゝ

ゝも五音相通せり

うゝ陸奥

あゝ吹こゝ玉の山れ出るゝ葉を龍田の川
乃錦なりけりとゝ詠まるゝ人の歌に散る
ゝも又流れ来るゝ山ゝ紅葉す其風情をゝ
せゝたゝちにゝ四川のふゝまとんる能因
法師の物語にて秋風吹渭水落葉滿長
安とゝ詠る同格なりゝ古人詩句ゝ

雨嵐中明く木下乃蝸牛

たゝかひしてをれしを或人のいとらく此日も
このむし此枝上よりそひのぼりかゝるもまた
ふまぬもきれしもいとすゝ此其言をきせて
たゝちふ樹下乃蝸牛の結形と同格
なりとよしゝ詩せ中其体の是非ハとゝれ
思ひよりつる事のゆゝしゝれをと男よりいつく

富士禅定

ゆゝしゝ多東都より拝する所駿河町の横ゝに
しゝ中秋を賞するとて西の方を遠く望
めいとゝゝ降積をつる
名月乃雪ゝゝゝ中不書の山
ゝゝひ出ゝゝゝゝゝの高根ゝゝゝゝゝゝ
ゝるゝ清光の廣大なるゝ對せるこゝゝゝの
景氣を作りゝん也五十余のむゝしゝ
なりゝぬゝゝゝ豊ゝ國のゝゝのゝゝなる雲花
ほしゝゝ開邪姫のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

てゆ世まことしいつある禅宗とら
登山あわしとく拾ふの信しよ身驚し
伝るさるにてもさ壮ん変すしに嘉むへ
君よ白んわまとふ月といへるの
右を紀行語るとくもの霊めにるよ送る

国府漢

国府八和名字ち波と列して数名勅り
出てゆ浮出るしくも其えしめあるゆしる

世らゆ乃手れるを後人さまよに製作し
さまよの名を設く侍よ工に賦よつ
をのれ〳〵ら懐ひを述る嫌とハかせるあ長
さきたをきまもいやよにも刹安くて愛
せるれ一品よなむさるを猟氏ら恩情の
逐さるを親きてる磨よ引るより筐中よ
うちこまれ〳〵西風を怨むとうひろ
侍ゆてゆを乃定めよもうちをく又
捨るかとひる一字を浸て秋の郭とせゆ
かてハ考よ母の益よるさものやうに

聞くにつけていまゝにはなほ益ある事
をあらんと法号武度ら出くハ三軍を指麾
しゝて越の猛将乃木行光の
鎧をうち身に受て法性院の庵まを敲ひ
よいくせ男玉薫ら紋つきたる旗の風にそ
ゝ一撰も吹らゝやてきたるも汗ふる柱杖と
布の袋と此物とうく和尚のこゝろをいさむ
鞍るに山の俤ハ坊人を答るにうちあのき
くゝ必善哉の言有土儀の上にて岩井木村が
の人とゝ鎮るゝく左右よりつて必東西ゝの

法あり打うすよゝくゝむひのそくゝたくしも盡
よしされとゝ者ら分の思ふゝ思ふゝ貴ゝら
れくゝ業をゝ山めぬさるくも山嶺の法佛梵よ
拓をゝ行ゆしハ平情躰よ高く高く西窓
ゝ鞍倶の調めよて是ら潰とあんんよハ些
不塩梅ゝ者さわとくゝ又風味くゝ古うち
すゝ句も調し出ねハ只知んらに云ら
句ひくゝ言ることの多とひまそくゝ
なくゝて獨生の友とするのゝ

月ハ打よ数ハ追つ拂ハ宮知波郎

い月十五夜月蝕

玉川ふる月弦の詩を月を蝕するものハ月中
乃蟾蜍也といひ俚説も亦舊しとハ文忠公
いつゆ又天狗爪月弦のごとゆ
久方の中なる枝をうゝすてゝ
あなたよむしの声なゆせう
ゝゝませ給へ是曙夫の盧仝と同し説を
とゆ給ひしと聞ゆ此中秋の月事あゆ大人ハ

歎惜し小児ハ恐怖す
泣ひとゝ見ゆゆ哭とお月さま

俳徳頌

慶長三年戊八月廿七衛殿下就山ゝ九條殿下
秋山公ゝゆ法印ゝ云方の君法眼紹巴法橋
宗養ゝ仰ゆ俳諧一道の宗匠を相承
真俗ゆふ免許あゆしゝゆ爰ゝ二百年
来月ゝ日に盛んゝゆるゝ世い故あゆ風月の

極にとゆく清きも歌よむこゝろ
なのりうを学すてハ口明経一四つとめ嬉き
業ハ皆俳諧の仏くなるべきこゝろ
とおぼえし人もあり
そむくしよりいまも雲のうへ
歴々の御口ぶりを俳諧にあゆ〳〵下情
をもたゞしめすへくなるべ仏乃徳なるすや
ばくゝとまるくの枝葉のうへを楽するに
みつるくゝ行歩こゝろを任せ乃心業なのり
老乃後健なるまゝ

恥ゝ止むるをこゝろすして慶るゝ楽あり
序甚服を調度をゝ人数揃ハ是をして八百屋
せぬ遊ひあり是を皆揃ゝて物ゝ沙ゝて
風雨なゝて妨られゝかねゝよりは設ける
いとつゝる業をてゆくあるをゝれまゝ入りゝる
体をひとつもあゝす是ゝ仏の行ゝすや
かれたゝう奥山のおゝゝ下鄙乃ゝ聖乃
未ゝくゝもゝみるおゝしくつゝ八其中ゝハすゝ
ゝの住ゝうちゝるゝ所ゝもとゝり来ゝ
ゝめての新をもたゝゝ世ゝ不よ杖を曳

しるしてこれをもてこれを一友のわかに或日来りて
今天下の風流家と十のうちて詩八其一分半
を得歌連哥八二分半も餘るハ俳乃
ものなるめをつれらをかをいふと昇う
こめうしろいてをしてを世中度く失ひるいて
う計得ま其考の程いとまをかくまれ俳も
景情の人をを感動せしむるにのをいふことを中
をよわるゆく斯もまに弄ふ人の多ゆるををん
ま八俗淡平語仆乃陋よまをうあるむ
文政二年庚辰

九州題林集序

越を東桂川の春波ゆつくり人の口すさびとも
を集めしものをそなる狀風莽ゆ筆勢
しハ文化丁卯の年ハなゆこをみ弗水九ゆ
欲林を編をしゆ稿のはしめを居士よをまとゆ
てをを見るハ文政乃此ハなゆ其趣を戊辰ゆ
をををゆをを十二月ををををををををを揚をる
句をの風姿の新をを同じ志の友ををを

ちあきんとく著ハせるなるれを外よこ蓙の
加ゆへのまもなうゆまきても此編者の弗れい
麦波とハ同人なりやうも此序者の居士まて
秋風菴とハ異人なりやとてす知る人こそ知
即浄居士

一渓法師の豊東乃行を送る詞

西月十三夜竹二一渓こそ者訪ひおそて彼の
後語ふこ更の鐘撞中仲辭しく出へさは

却きはなるこす東藤の方ふ越なんこふとて
あるむるふハ詞の餞得まくほしとこ後ひぬうけ
ちゆうこ別きて頓てうち卧るこ方ふらんるやう
此尊者いつくまても安住しく勢を御す常
ふ四方の志あれそいうへの大とこ達のうへ
ふしく進ふう機すへふ故事なるもうれと趣向
求むるふハ求めるすしくおもひうけて
月ゆこ月生死の海乃外をゆけ
との一章をゆうゆまくふうけこゆ寄こて
考るに句こ言紅しこ乃ふ言弁の所作

なめれども文字の數乃合ひさることを吉ひのす
あるめるれも奉強してとるよしうハ佛ゟ不
滅仙ゟ老なと說ゟるとや獨り所とせゟ
取るも捨るも岩の料理ゟ所ゟ塵俗ゟ
沈める身ゟしてなるとを不しるすす
へき場乗ゟ三不惑ハ元来ゟ者の守ゟ寡苦
提明鏡の樹ゟ非ゟ臺ゟあるとゟハ無てゟ
者の悟入せゟ所也返すく也道心堅固ゟ且過
しゟまゟる道行ゟゟゟゟゟゟゟゟハつゟ
向けゟまゟひゟせゟ十五年のゟゟハ世ゟ事ゟあゟ

翌ゟまゟくもかゟらむゟゟゟ再會ゟ期してゟ情ゟ
慰むゟ

海のゟゟゟひゟゟゟゟ日田乃水

文政六ゟ

駝岳黄向ゟ集句

ゟゟゟゟ雜談波ゟハ渠ゟゟゟ新穿ゟ羽の言葉
あゟゟゟ机ゟゟゟ人ゟゟゟいゟゟゟ績ゟゟゟ話せし
ゟゟゟゟゟゟゟ駝岳ゟゟゟゟゟゟゟ世ゟ翁ゟ

なりぬ流義乃一隅をやぶり風調をよく世と
共に推移をなく交り学く其傳燈を掲げ
来れる人都て祖意を協つゝ〳〵いとし
乙亥の春弁菴を新たにすゝめ道境附
囑のぬし八千坊あり師の生涯の句を拾て
一集を編て七十郷の追慕をせんとや是まで
よく継よく思ふ所あるべしと
いとのしるしを窟識るまて序の寄ゆゆ
うれを四十餘年の間なるを六十五歳の
敦厚筆す

又改年日三月

三石亭諱

君ら代の寿吉波乃つるとゝめゆるむ石の敷も
かゝるのゝ三つゝゆるる芦さゝのおゝし
けなるゝを愛ゝゝに方丈のいとゆむすひ
てこゝ乃名を呼つゝ遠花人なりゆゝむろ
の外ゆゝゝゝ新宮の想ハせ門義猶設けてゝ風
勞をゝを忘れゝゝゝ日ゝゝゝく陰徳のゝゝゝろ

よりて更に名を桂く好婦を得よりとの
ことなれば方外のみちあるべしとてこゝも
四面乃眺望四時の変化ハ自序に尽されたれ共
加之よ業なりうも此石亭起りしより年
成さむ望ハ杉そ山ともてゝの山に鍬
とりて杉脂茯苓求め出つ黄初平ら仙を
学ひて只いつくもこの亭に遊ひ楽へや

辛巳仲夏

跋

秋風莽莽句集二巻、當伯考中年
寛政丙辰ら歳門人金弗水選而
刻之、此編為其後集、俳句一巻、俳
文二巻、合為文政丁亥、家君與弗
水及藤君来輯之、而上於梓、實
伯考歿ら六年也、丙辰ら板、今已系

存、蓋伯考不以俳求名、梓行之事、非其素意、刻既成、委諸書肆、名復所問、終至於失亡、極可惜也、然伯考俳句中年以後、頗変風格、識者稱其老而益進、此編所収、始丙辰、終辛巳、凡二十餘年、則前之所亡、亦不甚惜、至俳文成集、自古希有其

角諸老、而及近時、不過五六家、殊可珍也、嗚乎、古之立言者、必有子弟門人、編集之、考訂之、又隨而鼓吹羽翼之、而後始得傳於遠也、伯考無子、視不肖建猶子、然建也以儒為業、不暇学俳、故當其生時、不能負荷其道、歿後亦不能助我父、以任編集考

訂之勞、其謂之何哉、若金藤二子、可謂不負本己、夫　伯考之名、噪於俳林久矣、但隱居放言、不趨時好、故與都六執牛耳者、不必相合、而年少後進、務出新意、排擠前輩以求勝、則恐此偏復蹈丙辰之轍也、伏願吾子、厚在伯考門者、嘗相識者、不

跋二

相識而相慕者、素不相慕、讀此偏而喜之者、相與鼓吹羽翼、而傳之於數十百年之外矣、天運巡環、無往不復、世道一変、則鄉所以為俚、今以為雅、彼所以為陳、此以為新、此偏雖低於前、必昂於後矣、安知其不與桃青其角逐之並立乎、嗚

呼家君老矣、建也不肖、此偏ら存亡
通塞、将レ在二衆君子一、加我不自愛二我
言ら嘆ら焉云爾、

姪建拝書

一とせ三方野ふりて舊き跡を尋ね
探らま和河内ものゝ国ゝ所所
ら城たつきと栗毛ら所ら所ら小
松ふるゝ枯ふるゝ草ら野ら原を鄙人社
多ら仕出ら方ら人ら友ら人の宿ら
あるゝ身ら入ら安ら行ら笑ら言ふ情ら

巻末の数三十餘年にして此の紙
を作る一生極楽に至る時頃大流
北河の畔にて信ずべき其の物を
見ずして賢に感ずべしこれに月仏師の
文集小木北あり一切余の花せず物
已の業れて唱師の久事を彼里人
業を相伝ずるを蓋貞精神情典の

源氏の遺文史の藻業を探て試
源語集北深淵を窺見一切積身を
亡て流山せる敢て毎一点無張
玉を擲命して其の翁の見天六ありて
毛乃て國して説法ありさるなく
しかるにいかんぞ北を捨て此
書を終て看師の法蓮花水ありも

漢詩或志ん家風国書有り
或示をもつて学問を教ゆ
崔躍に従ひ大江の峰に墨を研西
河等北清らを伝授し敬法を伝
頭まといふ元保四癸巳年の日一首示人

鶴鈴和尚のいつも家の家を
ふれ人ふるさとよく
ふるさとも富貴なる
系性俗の風雅をこの年
の如き風雅をもつて
よつてつる大江の
きこえ河のたよりて四季の
学の句の和歌雅風歌学
中興学者ようやくしたつる
道すきこの歌の富をもつて

[illegible]

[illegible]

[illegible]も[illegible]を[illegible]
[illegible]風流[illegible]
[illegible]
筑紫[illegible]
[illegible]集入[illegible]
[illegible]
空[illegible]
[illegible]
[illegible]高[illegible]
[illegible]と[illegible]

[illegible]
三人[illegible]
と[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

文雅の俳集又おうさまに
門葉の人々より所の紀行をも
とりのきんなりこれるおさまるあし
かりしをさとる弗の高きを
さしをみてうよ重雅を学ぶ者
嘱ぶりよりよわさちをれとあふらち
言をきのさりきを集んとるを所ち
れの色風雅の神とをく
ふをきれし因ぶをもて志を
進ていをの道を重ぶ

跋八

拙をもて序を請るを
許りかな

文政癸未仲秋　宜春亭玉東述

友人　朗郁書

天保十一庚子年九月
豊後日田　秋風菴藏板
浪花書房　心齋橋北久太郎町南　塩屋忠兵衛

中氏